

2022年1月23日 礼拝説教要旨

詩編講解説教94「救いを待つ人」

詩編94：12～19、ヘブライ12：4～6

詩編第94編の背景にはバビロニア捕囚があると考えられます。それゆえ国を滅ぼされた民の嘆き、さらには神さまに報復を願う嘆願の歌となっております。「主よ、報復の神として、報復の神として顕現し、全地の裁き手として立ち上がり、誇る者を罰してください」（1、2節）ところが12節以下は一転します。「いかに幸いなことでしょうか」とあります。ここでは幸いが語られます。この詩編が伝えようとしていることは、苦難の中でも神さまが共におられる幸いです。「足がよるめくとわたしが言ったとき、主よ、あなたの慈しみが支えてくれました。わたしの胸が思い煩いに占められたとき、あなたの慰めがわたしの魂の楽しみとなりました」（18、19節）そう詩人は告白します。わたしたちは苦難の中でも、神さまが共におられるなら幸いなのだということを素直に信じてよいのです。

「いかに幸いなことでしょうか。主よ、あなたに諭され、あなたの律法を教えていただく人は」（12節）とあります。ここに「諭され」とありますが、これはむしろ「懲らしめ」と訳されるような言葉です。ですからこの諭しは優しく諭すようなものではなく、かなり厳しい諭し、試練と理解してよいでしょう。実際、この詩人は捕囚という現実の中に置かれています。何よりそれがこの諭し、懲らしめであると理解することができます。けれどもその中でも神さまが共におられることでこの詩人は慰められ、幸いを実感しています。

神さまの諭し、試練を経験するときに忘れてはならないのは、その試練はわたしたちが一人で負うものではないということです。ヘブライ人への手紙に「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである」（12：5～6）とあります。神さまの諭し、試練は、わたしたちを一人苦難の中に放り出されるようなことではなく、そこにはなお神さまとの関係があります。それは父と子の関係です。そうでなければわたしたちはどうしてこの世の試練を耐えることができるでしょう。「主がわたしの助けとなって下さらなければ、わたしの魂は沈黙の中に伏していたでしょう」（17節）この「沈黙」は死の世界、陰府を意味します。神さまが共にいてくださらなければ、わたしたちは試練の中でただ陰府の中に伏すだけになってしまいます。しかし試練の中でも神さまは変わらずわたしたちの父であられるのです。

どうしてそのことを信じることができるのでしょうか。それはイエス・キリストを通して信じるのです。「災いをもたらす者に対して、わたしのために立ち向かい、悪を行う者に対して、わたしに代わって立つ人があるでしょうか」（16節）わたしたちは試練の中でも、わたしのために悪に立ち向かってくださる方がおられること、わたしに代わってその矢面に立ってくださるお方がおられることを知っています。それがイエス・キリストです。

キリストはわたしたちが受けるべき最大のサタンの試みをお引き受けになられました。わたしたちに代わって、これに立ち向かってくださった。しかしそこにも父と子の関係がありました。ゲッセマネの園で主は「アッバ、父よ」と祈られました。またルカ福音書は主の十字架上の最後の言葉として「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」（ルカ23：46）を伝えています。

あの十字架の上にも父と子の関係がある。わたしたちは洗礼を受けてキリストに結ばれ、神さまの子とされました。キリストに結ばれている限り、たとえ試練の中でも神さまとの関係が終わることはありません。

そしてさらにわたしたちは神さまの救いが必ず成し遂げられることを信じることができます。「主は御自分の民を決しておろそかになさらず、御自分の嗣業を見捨てることはなさいません」(14節) 神さまはわたしたちを決しておろそかになさらず、見捨てることはなさらない。神さまが最後まで救いを貫かれるという約束です。「嗣業」とは受け継ぐもの、救いのことですが、それをお忘れにならないことです。救いを最後まで貫かれる摂理の信仰がここにあります。また「正しい裁きは再び確立し」(15節) ここは聖書協会共同訳聖書では「裁きは義に帰り」と訳します。その裁きがわたしたちを義に導く。試練が神さまとの祝福の関係の中にわたしを連れ帰るといいます。わたしたちが経験する試練はそのような試練、試みなのです。

何よりその信仰が「苦難の襲うときにも静かに待つ」(13節) ことを可能にします。新たな変異株の出現により世界はなおパンデミックの危機にあります。その中で今日この詩編94編を共に聴くことができるのは幸いです。主がこの試練の中にも共におられ、しかも救いを成し遂げてくださる約束をしてくださっております。だからこそわたしたちは試練を耐え忍び、静かに待つのです。讚美歌291番「しのびて春を待て、雪はとけて花は咲かん」確かに今は冬の時代でしょう。でも必ず春が来ます。神さまは、いつとも離れることなく、わたしたちを祝福の中に連れ帰ってくださいます。御言葉は絶えずそのことを教えています。